

自由討議(1)

教育委員会行政視察について

I 視察日程 令和5年(2023年)10月2日(月)～4日(水)

II 視察先と主なテーマ

- (1) 宮城県石巻市教育委員会学校安全推進課(防災教育)
- (2) 石巻市震災遺構 門脇小学校
- (3) 大熊町立学び舎ゆめの森(義務教育学校)
- (4) (旧)大熊町立熊町小学校



《学校安全推進課にて説明を受ける》

III 視察者

教育長 遠藤 洋路

教育委員 小屋松 徹彦、西山 忠男、苫野 一徳、澤 栄美、村田 慎

(随行者:指導課長 福田 衣都子)

IV 視察内容

1 宮城県石巻市教育委員会学校安全推進課(防災教育)

〈日時〉10月3日(火)9:00～10:20

〈概要説明〉東日本大震災の後、石巻市の震災を風化させないために、地域や学校において様々な取組を行い、自分の命は自分で守る児童生徒の育成、地域貢献ができる児童生徒の育成、教職員の災害対応能力の育成に取り組んでいる。

(1)石巻市の防災教育について ※当時の被害状況(平成23年3月11日)

[石巻市の人的被害] 死者数:3188人 行方不明者:414人

[市立学校被災状況]

	小学校	中学校	高等学校	幼稚園	合計
学校数(現在)	43(32)	21(17)	2(1)	5(6)	71(56)
被災校数	18	6	1	1	26
うち全壊	7	1	1	1	10

[児童生徒の人的被害]

	小学校	中学校	高等学校	幼稚園	合計
児童生徒数	8689	4599	913	295	14496
死者数	125	27	7	7	166
行方不明者数	13	3	0	0	16

[教職員の人的被害]

	小学校	中学校	高等学校	幼稚園	合計
教職員数	751	427	100	39	1317
死者数	11	2	0	0	13
行方不明者数	0	0	1	0	1

- 直接被害…旧北上川河口部は無堤防のため大きな被害
- 間接被害…津波が市街地へと浸水し、数日間にわたり都市機能が麻痺
 - 車や船、タンク、丸太などが流出し、被害が拡大
 - 火災が発生した家屋などが津波で流され、火災が拡大
- 避難状況…避難者数約6万人中4万人が学校避難所へ避難

(2) 震災を風化させない取組

① 学校安全推進課の設置 平成26年4月設置(10年目)

- 1 目的 (1) 東日本大震災の教訓を伝え活かすこと
(2) 安心・安全な学校環境づくりを行うこと
(3) 児童生徒の命を守るための防災教育や安全教育を推進すること
- 2 構成員(6名) 課長1、課長補佐1、指導主事2、主幹1、主事1

② 石巻市学校防災推進会議の設置 平成24年2月設置

- 1 目的 (1) 東日本大震災の教訓を活かし命を守ることを第一とする
(2) 学校防災の分析、調査、審議を行う
(3) 大川小学校事故検証報告書24の提言を具現化する
- 2 本会議の構成員(21名)
学識経験者、教育支援団体、町内連合会、PTA協議会、消防、視聴部局の防災・地域協働関係課、市立学校職員等

《主な取組》

ア 提言2「文部科学省及び都道府県・市町村教育委員会は、各学校の防災意識や危機管理意識を高め、具体的に子どもたちを被災から守る実質的な研修を実施すること。」

⇒石巻市教委主催「新任校長・教頭等管理職研修会」「管理職対象学校防災研修会」

「石巻市初任者研修」「石巻市防災主任研修会」

イ ワーキンググループの活動 WG1「防災研修」、WG2「防災管理」、WG3「防災教育」

【WG1 「防災研修」】13名

- 1 防災主任を対象とした研修会の実施(年4回)
- 2 管理職を対象とした研修会の実施(年1回)
- 3 学校防災フォーラムの実施
- 4 クロスロード石巻版児童生徒編・教職員編の活用推進(防災を学習するために開発したゲーム、各校に1セットずつ配布)
- 5 復興・防災マップづくりの広域化

【WG2 「防災管理」】14名

- 1 地域防災連絡会の活動促進と状況調査(設置校56校・園 R2 100%達成)
- 2 学校安全マニュアルの点検、改善指導
- 3 大川小学校自己検証報告書24の提言に関する取組状況調査

【WG3 「防災教育」】12名

- 1 防災教育副読本の活用、改訂 ※「未来へつなぐ」H24作成→R2 全面改訂
- 2 防災「合言葉」の募集（下記は R4 作品）
※「言えるかな？もしもの時のひなん場所 行けるかな？確認しよう ぼくらのルート」「家族の事 不安になっても戻らない 命を守ればきっと会える」

③避難訓練学校訪問

⇒各学校の避難訓練に学校安全推進課長・指導主事が訪問し、訓練状況を把握。評価、改善指導を行う。

- ・各学校では立地する地形に応じた災害リスクを基にした避難訓練を実施
- ・震災前は年間3回程度だったが、現在は平均年間7回程度。年間12回実施する学校も
- ・教師不在時の休み時間、清掃時間、登下校時、部活動時など、発災場面を工夫した避難訓練を実施
- ・コミュニティスクール導入校では、学校運営協議会委員や保護者、大学教授が避難訓練を参観するなど、地域や関係機関と連携した訓練を実施

④石巻市学校防災フォーラムの開催(本年度は8月8日に開催)

- ・復興防災マップの取組についての児童生徒実践発表
- ・講話「地域組織や人材と協働した学校防災の自校化」
- ・パネルディスカッション「地域ぐるみの学校防災体制を充実させるために」
- ・「復興・防災マップ」、防災「合言葉」優秀作品、防災教育副読本、学校安全マニュアルチェックリスト、携帯マニュアル等の展示

⑤セーフティプロモーションスクール認証に向けた取組を推進(現在15校)

※学校安全コーディネーターを軸に警察・消防・行政・自治会・家庭などと連携を図り、学校安全の取組を行っている学校

(3)学校における防災教育

①石巻市防災教育副読本の活用

→業前の時間や避難訓練、学級活動等で活用 学年の発達段階に留意し、計画的に指導

②学校安全教育計画

→各教科での学習、行事での学習

③11月石巻市総合防災訓練の参加・地域連携

→登校日とし、各校で地域や保護者と連携した工夫した取組。教育委員会も各校を訪問し参観予定

④クロスロード石巻版を活用した授業 ※研修会等でも活用

→防災主任が作成したもの。各校で配布。児童生徒の学習や防災研修等で活用

⑤復興・防災マップコンクール、防災合言葉への参加

(4)質問項目への回答

①《震災前後の防災教育の変更点》→より実践的計画的に、 伝承、教訓を生かす、地域連携

- ・防災教育副読本を作成したことで、各教科等との関連もふまえながら計画的に防災教育を行うようになった。避難研修会も地域の災害特性に応じたより実践的な訓練を行うようになった。
- ・震災から12年が経過し、風化が懸念されるようになってきた。副読本でも震災当時の写真を掲載するなど震災当時の様子を伝承することで教訓を生かす学習につなげている。避難所対応等も含め、地域連携における災害に備える体制の大切さを子どもたちに伝えている。

②《被災したからこそ感じた重要な防災教育とは》→地域の災害特性を知る・備える・地域貢献

- ・復興防災マップづくり等を通して、自分たちが暮らす地域の災害特性について知り、備えるためにはどのような取組が必要か、地域の方にも協力してもらいながら防災教育を進めている。
- ・防災主任研修会でも地域の災害特性からの避難のタイミングを考える内容の研修や学校安全マニュアルの作成等に取り組んでいる。

③《避難場所運営における課題》→各校で作成した避難所運営マニュアルの周知・地域連携

- ・役割分担を明記しても共有することが難しい。地域によって温度差もある。コロナ禍の3年間、地域コミュニティが機能しなくなった地域もあるため、学校が中心となって進める必要がある。
- ・避難所運営に関しては、発達段階に応じて児童生徒にもできることを考えさせ、地域貢献できるような教育も進めている。

④《防災訓練の在り方》→地域の災害特性に応じた地域と連携した訓練を推進

- ・11月5日(日) 石巻市総合防災訓練…市内全小中学校・園は登校日になっている。
- 実際に災害が起きた時にはどこに避難するのか、各家庭で確認し地域の方と災害の備えについて考える機会となるよう、地域防災連絡会で話し合っている。

(5)石巻市の課題

震災の記憶の風化 災害に対する備えの温度差

⇒地域の災害特性や児童生徒の実態に応じた防災教育と教職員研修の継続！

自分の命は自分で守る児童生徒の育成 地域貢献ができる児童生徒の育成 教職員の災害能力の育成を目指して、石巻市一丸となって取り組んでいく。

(6)質疑応答

Q1:防災マップは、どのように作成・活用されているのか？

A:平成24年に一つの小学校が、大学の先生方等のアドバイスを受けながら子どもたちが作成した。マップ作りを通して、子どもたちが地域の事を知ったり、地域を好きになったりすることを目的としている。主に子どもたちが街歩きをしながら町の中の危険な箇所等をマップにまとめ、記事をのせていく。それを地域の中で発表したり、配ったりしている。防災フォーラムでも発表している。

Q2:避難訓練が、形骸化してしまうことはないか。震災の経験を忘れない工夫は？

A:避難訓練が形骸化してしまうのは、授業中しか設定していなかったりすることも原因。いろいろな場面を子どもたちに想像させ実施するようにしている。(給食中、登下校中、家で一人の時、お店等でも家の人と離れている時…など)また、日頃から家族で話題にして決めておくことも大事にしている。課題としては、先生方は子どもたちの命を守ることに必死になっていて、自分の命を守ること(机にもぐる、ヘルメットをかぶる等)がおろそかになっているので、先生方も「自分の命は自分で守る」ということを子供たちに言い、事前指導をきちんとするように伝えている。また、学校は事前に教育委員会に避難訓練の計画書を出し、指導主事はその内容(想定、実施方法等)の確認をしている。沿岸部の学校の避難訓練を見た時、子どもの本気さに感動した。子どもが学校で学んだことが親につながり、地域へ広がることも大事にしたい。

Q3:セーフティプロモーションスクールの有効性はどうか。

A:学校での防災の取組は様々に行っているが、きちんと整理してみると抜けているところが見えてくる。学校ごとにそこを強化していく。9年スパンで考えられ有効である。

Q4:震災直後に、教育委員会として生かした教訓は何か。

A:防災も学校安全もきちんとマニュアル化し(危機管理マニュアル)、訓練を行い、またそのマニュアルをチェックしていくことを大事にしている。裁判では、マニュアルの不備という点が一番大きかった。

Q5:学校にいないときの子どもの安否確認はどうしているのか

A:アナログに訪ねてまわる。また学校メールの活用など。しかし実際の場合には、いろいろなことが麻痺してしまうので、避難場所はどこに行くかを、あらかじめ学校に提出する書類に書いてもらい、そこをもとに訪ねて歩くということも考えている。集合場所「何かあったらココ」ということをはっきりしておくことは大事。

Q6:年間 14 時間の防災教育は、どのような位置づけで行われているのか

A:業前の 15 分間を月に一度(年に 10 回)実施している学校や、総合的な学習の時間に街歩きを設定している学校、社会や理科などで地震等に関する教科内容を横断的に活用している学校もある。

Q7:心理的ケアはどうしているのか。今も必要な子どもはどのくらいいるのか

A:家族を亡くした子どもはたくさんいる。当時生まれた子どもたちが大人になるまでは、ある程度ケアは必要。阪神・淡路大震災の教訓を受けても、少なくとも 18 年はケアが必要と言われた。自分たちも実感している。

Q8:防災主任は各校に1人か。転勤等でどうなっていくのか。

A:防災主任は、各学校の中で主任として充てられていく。転勤したらまた別の方が担当する。安全担当主幹教諭については、小中5名ずついて、各地区に一人ずつ配置している。この方々は「職」として担当しており、防災主任を兼務できる形になっている。

2 石巻市震災遺構 門脇小学校

〈日時〉10月3日(火)10:40~12:10

〈概要説明〉地震発生直後、学校にいた児童・教職員らは訓練どおりに日和山へと避難。

地震から約1時間後、大津波が襲来。津波火災が発生し、校舎は炎に包まれた。南浜・門脇地区では500人を超える方が犠牲となった。石巻市は、震災の事象と教訓を伝え続けるために被災した校舎の一部を残した。門脇小学校は津波火災の痕跡を残す唯一の震災遺構であり、避難を考える時垂直避難だけでは難しい一面があることを伝えている。

【震災遺構 門脇小学校 見学コース】

- ①プロローグ
- ②震災遺構(本校舎)
- ③記憶を紡ぐ
- ④門脇小学校の思い出
- ⑤門脇小学校の震災被害(映像20分)
- ⑥教壇を使った避難
- ⑦石巻3.11(ラジオ音声)
- ⑧石巻市の被害状況(映像10分)
- ⑨石巻平野と巨大津波(プロジェクションマッピング)
- ⑩心をほどく
- ⑪復旧・復興



《津波火災で焼けた本校舎》



《校舎内部:外部通路より見学》



《校舎内部:当時の様子がそのままに》



《展示館(焼けていない校舎):
様々な思い出の品の展示》



《被災車両:屋内展示室に展示》



《仮設住宅:屋内展示場に展示》

3 福島県大熊町立 学び舎 ゆめの森

〈日時〉10月4日(水)8:30~10:45

〈概要説明〉

大熊町は、2011年3月の東日本大震災による原子力発電事故により、全町避難を余儀なくされ、幼児・児童・生徒数が被災前の約1パーセントまで減少。避難先においては、幼稚園1施設、小学校1施設、中学校1施設で教育活動を再開してきた。平成30年6月の「大熊町教育大綱」、平成31年3月の大熊町第二次復興計画改訂版において、2022年春に大川原での幼小中一貫の教育施設が示され、現在の新教育施設の整備が検討されてきたもの。

新型コロナウイルスの影響等で建設工事が遅れ、施設の竣工は令和5年6月となったが、義務教育学校大熊町学び舎ゆめの森としては、令和4年4月に開校。認定こども園と共に令和5年4月に大熊町に帰還し、町内での学びを再開。2学期より新校舎へ移転。

(1) 考え方・大事にしているもの・願い

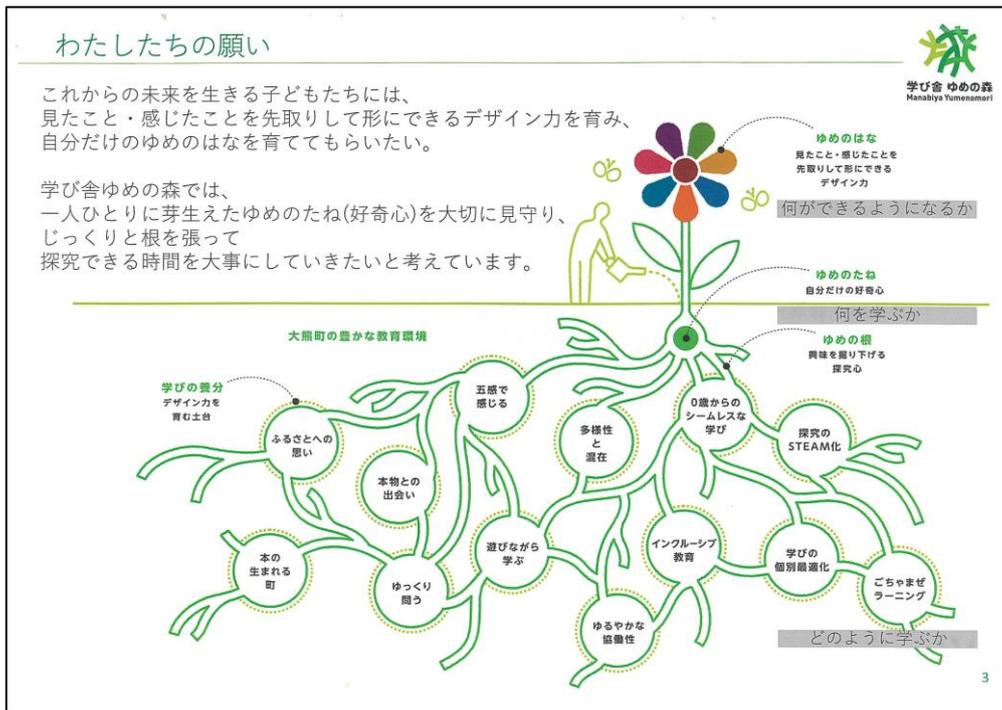
ゆめを見つける
ゆめを分かち合う
ゆめを育てる

自分の「好き」を見つけて
時間をかけてじっくり向き合える。
学校には家族のような
仲間がいる、先生がいる。
失敗を責めることなく互いを認め合い、
小さな成功の喜びを分かち合える。
そんな幸せな子ども時代を
過ごしてもらいたい。
遊びの中から多くを学び、
学びの中にも遊び心を忘れず
自分らしい未来を切り拓く力。
学び舎ゆめの森は、公教育の可能性を信じて
子どもたち一人一人が輝ける
夢の学校づくりにチャレンジします。



学び舎 ゆめの森は、地域の中心として 0歳から15歳の子どもたちが共に学ぶ場所

2023年度、「学び舎 ゆめの森」が誕生します。0歳から15歳の子どもたちがともに遊び、学び、さらに地域の方々とも協働していく学び舎です。多様性に満ちた社会において、子どもたちが自分で考え、人と協力して生きていく力を育むことを目指しています。東日本大震災と原子力災害で被災した当町に、教育施設が戻るのは12年ぶりです。子どもたちの健やかな成長を第一に、ゼロからのまちづくりが進む大熊だからできる教育を実現していきます。 《大熊町教育委員会》



(2) 園児・児童生徒数 ※赤字は2023年度中の転入による増 (人)

園	0歳	1歳	2歳	年少	年中	年長				計	合計
	1+1	3	2	3+1	1	1+1				11	
学校	1年	2年	3年	4年	5年	6年	7年	8年	9年	計	31
	4	2	2	0	4+1	5+1	1	0	2	20	

※10月11月で、あと6人ほど増える予定。現在保護者と打合せ中。赤字はほとんどが移住者

(3) ゆめの森のビジョン…「学校の目指すところはこれにつきる！」

「わたし」を大事にし、「あなた」を大事にし、みんなで未来を紡ぎ出す

「わたし」を大事にし

→自由の獲得。生きたい人生を生きる自由、生きたい社会を創り出す自由、生きたいコミュニティを創り出す自由。どういう人生を生きたいのか、どういう社会を生きたいのかということを、「わたし」を主語にして打ち立てられるように。そのためには、そのゆめを成しうる力もしっかり育てていきたい。

「あなた」を大事にし

→自由の相互承認。大熊町は帰還率5%。これからがまだまだ遠い道のり。一人もどうでもいい人はいない。すべての人を取り残さない。一人一人が大事。原子力災害に直面したこの地域、このゆめの森から、最も優しい社会を創り出していきたい。

「みんなで未来を紡ぎ出す」

→様々な地域の未来、社会の未来に向けた活動を、子どもたちが地域の方とも共鳴しながら進めて行くその先に真の復興があるのではないかな。

(4) こういったものを成しうる力として

生涯幼稚園児～熱中する探究者～としての資質・能力の成長

◎教育目標・育成を目指す資質・能力



- ・創造力を育成するためには、幼児教育に大きなヒントがある。
- ・保護者ともどんな子どもを育てたいか、今後議論する予定。長期的な視点で、自分の子どもだけでなく、みんなでみんなを育てていくというようになっていくことを願っている。

(5) 特色ある学び

① 0歳からのシームレスな学び ★それをめざした空間・交流・教員同士の研鑽

- 認定こども園と義務教育学校の子どもたちが共に学ぶ環境を生かしたシームレスな学びを展開
 - ・幼児期の「あそび(内発的関心・問いからの没頭)」の力を伸ばし、学校の「学び」も教材を受動的に学ぶのではない内発的な「探究」へと転換
 - ・社会情動スキルの基盤を形作る幼児期から青年期まで一貫した理念とカリキュラム
 - ・理念、環境(時空間)、授業・行事、教員の4側面からシームレスに連動した“ごちゃまぜラーニング”を展開

② 学びのマネジメント ★自分の学びのハンドルを自分自身が握る！

- ICT を徹底的に活用した個別最適な学びにより、習得の状況を自覚しながら自らの学びをよりマネジメントする力を身に付ける。
 - ・一人一台タブレットで、AI 型教材「Qubena」とスクール・コミュニケーション・プラットフォーム「ツムギノ」を活用し、知識の習得や授業外のコミュニケーションを加速
 - ・知識習得の時間を大幅に短縮し、教科の視点から探究を深化させていく深い学びを実現
 - ・時間割を自ら組み立て、得意を伸ばしたり苦手に向き合う「学びのマネジメント」の力を育成
- ※時間割を金曜日に自分たちで決める、自分で自由に決められる「レベルアップの時間」を一コマ設けるなどいろいろなしかけ
- 単に自分のやりたいことを組み立てるのではなく、目指したいのは学びのマネジメント、「来週英語のテストがあるから、頭がクリアな午前中に英語を入れようか…」など

※通知表も変えた。夏休み前には口頭で今の段階の習得の状況を保護者と子どもたちに伝える。その結果を踏まえながら夏休みをどうするか、夏休みの宿題は自分で決める。2学期の冒頭にチャレンジ週間を設け、習得の状況についてもう一回確認し、そこで成長していれば正式に通知表にも反映する。自分の努力が結果としてもフィードバックしてあげられるようにしている。学びと夏休みの宿題をうまくつなげるための試行

③ カリキュラムの柱～未来デザインの時間

→自らの「興味」と「問い」を出発点として、大熊の豊かな人や歴史に時間をかけて向き合い、各教科の知識や見方考え方も発揮して探究を深め、汎用的能力を育成

- ・大熊の自然環境や人と向き合いながら栽培・飼育・加工・販売等の活動を通じて、持続可能な大熊の未来像を探究する「ネイチャーラボ」と、演劇表現に取り組む「リベラルアーツラボ(演劇教育)」

- ・2つのラボや各教科での学びの成果を発揮しながら各自がプロジェクトを実践し、自らの生き方の創造に繋げる「未来デザインプロジェクト」

④ 演劇教育～ゆめの森の物語の創造 ★プロジェクトとしてとても有効な学び！

→地域と向き合いながら演劇表現に取り組、自己肯定感や表現力、協働力や創造力を磨くとともに、新しい大熊の物語を紡ぎ出す。

- ・専任アーティストが学校に常駐し、4C(クリエイト、クリティカルシンキング、コミュニケーション、コラボレーション)の力の育成

- ・他者との出会いでの共感を出発点として、身体表現に落とし込み、演劇表現を創造

- ・解体工事で更地が広がり、コミュニティの分断にも苦しむ大熊で、子どもたちが新たな大熊の物語を創造し、地域と共有



《校舎内は、特徴的な形と名前をもった11のエリアで構成》



《校舎中央の広場には、巨大スクリーンも設置》



《校舎中央の大きな吹き抜けの図書広場》



《校舎内全体が図書館》



《各コーナーや教室の名前は子どものアイデアから》



《学びの場も様々。時間割は毎週金曜日に自分で考える》

学び舎 ゆめの森の うた (校歌)

作詞：谷川俊太郎 作曲：谷川賢作

ひとりっていいな ルンルン
 みんなもいいな グングン
 ひとりもいいけど でもやっぱり
 みんなといっしょがいいな
 ぼくとあなたと
 わたしときみと
 すきなものは ちがうけど
 きらいなものは ちがうけど
 ひとりとひとりとひとりでみんな
 ひとりとひとりとひとりでみんな
 ゆめのもりで
 いっしょにまなぶ
 ゆめのもりで
 いっしょにあそぶ
 それぞれのあすをさがして
 きょうのおおきなそらのした
 ドレミファソラシド
 ドレミファソラシド
 ゆめのもりで
 まなんであそぶ



《認定こども園》

4 (旧)大熊町立熊町小学校

〈日時〉10月4日(水)11:00~12:00

〈概要説明〉東京電力福島第一原発から3.5キロ南に位置する福島県大熊町の町立小学校。震災後、大熊小学校とともに会津若松市に移転し教育を再開。2022年4月に、義務教育学校 学び舎ゆめの森としてスタート。熊町小学校のある地域は、現在も帰還困難区域であり、校舎は中間貯蔵施設の敷地内にある。校舎内は震災当時のまま残されている。国・町の許可を得て視察。



《学校入口にある看板》



《草木が生い茂り、校舎は見えにくい》



《震災直後に止まった時計》



《ツタが伸びた校舎の壁。教室の中は当時のまま》



《運動場。草が生い茂る奥にサッカーゴールが見える》